

# 散華樂曲の来た道（敦煌卷）

## 〔提綱〕

散華樂曲は法會上詠唱の一種佛曲。其發源于印度、經西域傳入了中原地域、吸收了中國傳統音樂的因素、至唐宋盛行一世。除中國之外、還在朝鮮、日本等地都有傳播。

敦煌文獻中有一系列帶散花樂和聲曲。筆者根據先師論著成果的基礎上、增加新獲材料、一共搜集了十六件散花樂曲、重新為之整理。以詞章和音律以及用途等內容、把他們分為三種類型。

(A) 讚佛系	七言	樂人淨道場唱	共十一件
(B) 奉請系	六三言或五言	僧人奉請諸佛唱	共四件
(C) 吊詞和聲系	五言	大衆吊問歌	共一件

其中、數量上和質量上占優勢的為打淨道場演唱的(A)系讚佛系、比(B)系多五倍、却未相傳到後世。它是一篇俱有口語成分的聯章體故事、和聲類型數般的、敦煌民間佛曲。(C)系為吊詞用的散花和聲、也是佛曲在生活上的一種應用。至今相傳為四個法要等佛教儀式重要組成部分的(B)系奉請散花樂、音律單調、別無內容、敦煌卷子裏數量並不多。

本文從散花樂曲的名稱、和聲類型、襯字等文字音韻方面進行分析、

鈴木（砂岡）和子

要證明入唐日僧圓仁以及創始五會淨土念佛的法照等著作裏所描寫的散華樂曲俱有音曲數般、男女僧衆和聲對唱的真实面貌。敦煌散華樂卷的存在反映着當時佛教儀式帶有濃厚的音樂色彩和口語表演的特征。

## 目次

0・同源異曲	
1・唐代の仏教声楽曲と散華樂	
2・敦煌卷散華樂曲一覽	
2・1 散華樂曲のタイプと資料狀況	
2・2 散華樂曲の名称について	
2・3 和声タイプ	
3・僧人散華樂と樂人散華樂	
4・散華盛衰	
〔資料編〕散華樂曲4種 付図	
0・同源異曲	

これは敦煌の調べと違うのではないか？一九九六年七月五日、日本の国立劇場小劇場。敦煌文書による委嘱復曲「敦煌琵琶譜」初演<sup>①</sup>のうたい文句に引かれてかけつけた演奏会が始まった瞬間、期待と異なる響きが流れ出した。

違和感は第一部「品弄」「傾盃楽」（芝祐靖復曲／指導）から第二部、復曲楽器による委嘱創作初演「疑似神託録・全五段」——琴と鷗尾琴のための——（中川俊郎作曲）および「吉祥経」（高橋悠治作曲）に至って増幅する。シルクロードのエキゾチックな調べは消え、中国伝統音楽の特異な単旋律とテンポが失われている。琴の調弦は厳密に設定されたが、採譜した音を繋げメロディーラインを割り出す作業と楽曲テンポの決定は、日本雅楽演奏の「勘」に頼らざるを得ない結果<sup>②</sup>と考えられる。

1988年、陽気な旋律と軽いリズムにのって敦煌壁画から抜け出したかのような天女姿の歌舞団が繰り出した。客と一献一酬を重ねつつ会場を一周する。敦煌トルファン学術会議で復演された「傾盃楽」も敦煌琵琶譜<sup>④</sup>に依り、敦煌壁画に描かれた楽器や舞姿を参考に復元された。しかし、日本雅楽とは異質の開放性と享樂性に溢れ、盛唐長安に流行したペルシャ趣味と、中国俗楽の即興性が特色の妓樂舞であった。同起源の楽曲が日中両国で異曲になる。復曲も伝統の文化に左右されるのであろうか。

現行伝承はまた各文化圏の過去とつながっている。1994年8月、敦煌の町で聞いた素人芸人たちの演唱する祭文は、中国西北地方に古くから伝わる秦腔調であった。悲憤哀切の唱声と激しいリズム伴奏は、

この地がかつて西域文化の中継地であった記憶を呼びもどす。伝統芸能は現在影響力が薄れつつあるとはいえ、このように民衆の心に深く根ざしている。天津の京劇院を埋め尽くしたファンが俳優の一唱一腔に熱狂するさまを目の当たりにすれば、北京のマライア・キャリーのCD人気も一過性の現象と映ろう。人々はむしろ中国ロック音楽の superstar、崔建（ツウイ・ヂェン）の西北民歌風の激しいテンポに奮い立つのである。

同源異曲となった敦煌琵琶譜復曲は、拙文の本題である仏讃散華樂の伝播を考察するさい、異文化の地で音楽形態が変容することを示唆している。

#### 1・唐代の仏教声楽曲と散華樂

「散華樂曲の来た道」と題したものの、筆者自身の力量不足と資料の乏しさから、果たして散華樂の通った道を辿れるのか不安な旅立ちである。今回は敦煌資料中の散華樂曲について報告したい。

散華樂曲は、法要開始にあたって会場を清め、諸尊を迎える散花供養時に、sanywala<sup>⑤</sup>和声付きの、中国語の抑揚と旋律で唄われた仏教声楽曲である。本稿では2・3章で述べるように「花林」和声も含めた広義の散華樂曲を対照とし、これらを散華樂和声曲または散華樂曲と呼ぶ。詞章はシャカ生涯讃嘆曲と、本尊諸仏の奉請詞および弔辞の三タイプがある。ともに法要儀式の莊嚴曲で、伝統的七言または五・六言の音律形式を用い、リズムカルな音曲につれ散華舞を伴った、華やかな浄土讃歌であったと思われる。快い旋律と和声の反復詠唱は法悦

を誘ったに相違ない。対照的に日本相伝の声明曲「散華樂」は旋律・詞句ともに単調かつ和声反復回数が少く、宗派によっては心唱や黙唱で済みます。<sup>⑧</sup>

仏教儀礼に音楽的要素を取り入れ、梵唄や頌偈を唄讃することはインド以来古く行われた修業の方便であるが、中国は極めて自主的に仏教を摂取し、伝統文化と巧みに融合させた。法悦は耳に止まらず、道場内外で俗講といわれる法会が盛行し、身体演技を伴って仏の教えを易しく説き唱う講經文や変文が好まれた。複数の俳優が演ずる中国最古の仏教劇シナリオも、唐末年の資料が発見されている。<sup>⑦</sup>

唐代において仏教儀礼に音楽的要素が重要であったことは、日本の入唐僧田仁も印象深く書き残している。<sup>⑧</sup> 浄土宗創設者の善導（六一三—八一）や継承者の法照（八世紀中葉）は、容易に修業できる口称念仏と礼拝行道を奨励して布教活動を展開した。法会に合唱と身体実践を取り入れることにより、浄土信仰は民間に深く浸透する。敦煌資料に残る散華樂曲を含む大量の念仏讃は、仏教音楽の集成といえよう。本稿は敦煌文献資料から散華樂曲の多様性を明らかにし、かつその音楽性と演技的要素に関する記述をさぐってゆきたい。

## 2・敦煌卷散華樂曲一覽

### 2・1 散華樂曲のタイプと資料状況

異文異曲を含め、敦煌文献中に現時点で十六点の散華樂を確認できる。廣川1984や饒1971の資料に漏れていた文献六点を加え、<sup>⑩</sup> 内容と用途により、以下三タイプに分類して掲げる。収集範囲は散華樂

和声の付いた音曲資料に限り、散華と題しても神英作「嘆散華供養讃」のように無和声（佚和声を含む）の作品は本稿では取り上げない。一覽表は拙稿1996に基き、旧稿の誤謬や分類方法に修正を加え作成した。散華樂曲本文は、各タイプの代表作品三種を付録に校録掲載する。

タイプ 音律 内容 演奏者及び用途 写本件数

(A) 讚仏系 七言 釋迦成道讚 樂人淨道場 十一件

(B) 奉請系 六三言／五言 勸請辭 僧人諸仏奉請 四件

(C) 弔辭和声系 五言 先師哀悼 弔問歌 一件

(A) 讚仏系（七言二句七首）散華樂 満道場 和声聯章型

文献名 状態 題名 句頭和声<sup>⑪</sup>（後記／作者／抄写人／年代／備考等）

（S・スタイン本 p・ペリオ本 d／前後文献名）

周字90号 完 無題 L/F許1963（俗字を正字に改訂）

校録による

北8362 首尾缺 無題 L/R建隆三年歲次（九六二年）癸亥五

（制字5号） 月四日

律師僧保德自手題記比丘僧慈願

誦 d和戒文

S.668v 首尾缺 無題 L/Rd金光明經四天王品第六 他の

散花落と字句に異同（例「樂」

を一律「落」に作る）

s. 1781 完

無題

L/R 乙卯年二月三日比丘金剛惠書記

文獻名

題名

勸請次第 和声疊数

之耳 d 庚辰年正月二日僧金剛

惠借麥子二條

s. 4690v 完

散華梵文

L/R d 金剛神符／懺悔文

北8345

(果字41号) 散華樂讚

②

(2s+R)×5+2s

法照念佛讚所収<sup>13</sup>

s. 5557v 首缺

無題

缺

P. 2130

散華樂讚

②

(2s+R)×6

d 同右

s. 5572 完

散華樂讚文

L/R 顯德三年(956)前後 d 出家

讚他／法照高声念仏讚

P. 3216

無題

①

同右

法照《略法事儀讚》

s. 6417 完

無題

L/R 貞明六年(920)庚辰歲二月一

日金光明寺僧寶印写梵題記 d

s. 2553

請觀世音讚

③ a

s×20

善導《轉經行道願往生淨土法事讚》<sup>14</sup>

戒榮本／臨壇文他

行道讚梵偈

③ b

s×3

P. 2563v 首完尾缺無題

L/L d 樂入山／樂住山他

P. 3645v 完

無題

L/R d 五臺山讚文／佛母讚／禮懺

文／無相禮 薩唾太子讚他

P. 3120

送師讚

s×22

d 法華經二八品讚

P. 4597 完

散華梵文

L/R d 法身禮／辭道場讚／西方樂／

般舟梵讚文他

攀綉

(B) 奉請系(六三言／五言二句六首 散華樂 和声型)

上中下三段に分かれ、中段は奉請する諸仏により詞章が異なる。勸

請佛の順序によって次の①②③三類に細分する。

① 釋迦如來 阿彌陀如來 觀世音如來 十方諸佛

② 釋迦如來 十方如來 阿彌陀如來(文殊普賢) 觀音勢至

③ 觀世音如來 彌陀世尊 釋迦如來 十方如來

合計十六件は讚偈文としては多い文獻数である。法照『淨土五會念佛略法事儀讚一卷』は「散華樂及び諸讚文は泥繩で読むことなく日頃からよく暗記して精通せよ」と次のように述べる。

散華樂及諸讚文 總須暗誦 周而復始 經讚必須精熟

不得臨時把本 唯五會妙音一坐 獨坐不得聲<sup>15</sup>

散華供養は法要時、道場に華葩(ケハ)と呼ばれる蓮弁形紙に彩色した色紙を撒いて仏を供養する儀式で、散華曲は一般に起立または行道中に詠唱する。諸仏奉請後に法要の佳境を告げる淨土讚文であって、

僧尼にとり必須文献であり、書き抄して暗唱に励んだことがわかる。敦煌資料の抄本数が多い理由はこの点にあり、ことに日本声明に伝わった(B)奉請系より(A)讃仏系の比率が高い点は、前述法照が「五会の妙音を一坐とすべし」というように散花樂讃が少くとも数種類の音曲で唱されたことを示唆する。

## 2・2 散華樂曲の題名

「散華樂」という呼び名は前掲のように固定していない。敦煌卷子では本文だけ抜粋した無題(首缺を含む)の「散華樂」抄本が最も多く、有題文献も題名には数種ある。(棒線を引いた文献名は上掲(A)讃仏系七言タイプを、無線はそれ以外を示す)

無題(首缺)	9件	周字90号	北8362 (制字5号)
		S. 668	S. 1781
		S. 2563	S. 5557
		P. 3216	S. 6417
		P. 3645	
散華梵文	1件	S. 4690	
散華樂讃	2件	北8345	(果字41号)
		S. 5572	P. 2130
散華樂讃文	2件	P. 4597	
請觀世音讃			
行道讃梵讃	1件	S. 2553	(善導 轉經行道願往生淨土法事讃)
送師讃	1件	P. 3120	(「花林」和声)
計16件			

タイプ別に集計すると

- (A) 讃仏系 無題(含む首缺)(8件) 散華梵文(1) 散華樂讃文(2)
- (B) 奉請系 無題(1) 散華樂讃(2) 行道讃梵偈・請觀世音讃(1)
- (C) 弔辞系 送師讃(1)

となる。無題抄本が過半数を占め、特に(A)讃仏系に無題が多い。必要部分だけの抜粋で事足りりとする敦煌仏教法儀文献に共通する抄写態度といえる。有題資料から敢えて題名の傾向を探れば(A)讃仏系は「梵文」「讃文」のように「文」と呼び、(B)奉請系およびそれ以外の散華樂は「讃」「偈」を正名とし、用途に合致する。即ち(A)讃仏系は道場の浄道場莊嚴用詞文で、(B)(C)は諸仏奉請や転經行道用の「讃偈」である。なおS. 4690の「散華梵文」の梵文とは本来サンスクリット文のことであるが、中国語訳の梵唄と考えてよい。六朝以来、諸大寺の法會で唱導する禮懺文を「梵讃文」と呼ぶのに等しい。事実S. 4690の詞章は(B)系他文献と変わらない。

## 2・3 和声タイプ

2・1表中の和声型記号の使用法は以下の通りである。

### (B)系

S × 20 「散華樂」を隔句に20回連唱する

(S+R) × 6 「散華樂」を2回と「入道場」を隔句6回反復

### (A)系 句頭和声

L/L型 散華+L(蓮)樂/落散華+L(樂)散華樂満道場

(\*S. 668は「樂」は一律「落」に作るが「樂、落」は通音)

L/H型 散花+L(樂) 散樂+H(花)

L/F型 散+L(蓮) 華樂 散華+F(梵) 散華樂滿道場

L/L型 散+L(蓮) 華樂 散華+L(樂) 散華樂滿道場

L/R型 散+L(蓮) 華樂 散華+R(林) 散華樂滿道場

果41号は「散々華々樂々」とあり、許1963はこの字順通り校録するが、敦煌文献の疊字記号の使用法に従えば「散華樂散華樂」とすべきである<sup>⑮</sup>。また「送師讚」の和声「花林」を散華樂和声に含めたのはs.6417、s.5572に「散華蓮樂 散華蓮」を訂正して「散華蓮樂 散華林」とあり、「散華蓮」散華林「華林/花林」の派生を想定した。或いは「花林」は「散華梵」の「梵」から「凡」を削除した「林」字であるかもしれない。いづれにせよ「林」には渡り音効果と「連綿」と続く「意味を有し、仏典中の「煩惱林」(煩惱の海)「得眼林」(仏教故事で多くの眼球を得た話)から、現代語の「菲林」(フィルム)まで用法が多い。「散華林」「花林」は天上の散華が連綿と降り注ぐさまを讃える和声である。

なお文献により、「散華樂」和声を本文大字と区別して右脇小字に書き分ける(s.1781 s.6417 p.3216 p.3645 p.4597)、単唱回数を記す(p.2130 p.3216)、反対に大小字を区別しない(制字5號 s.5557)、本文に続け連写する(s.5557 p.2563)、復唱回数を示さない(p.2553)、「散華」の「華」を「花」と略体字を用いる(制字5號 p.2563 p.2130)など異文がある。

句頭和声は「散華+L(蓮) 樂 散華樂」「散L(蓮) 華樂 散華+R(林)」など「蓮-lian」「林-liem」の流音を組み合わせ、滑らかで耳

に心地よい和音を創っている。「散華樂」自身「樂liak」は「子音を有し、歌唱のリズムを整える襯字(一句の規定字数を超えて用いる調節音)の役割を担っている。仏讚には「音を使用した和声が多数存在する。無意味の流音以外に、有意義の和音があり、五会念仏に収める有意義和音の例には次のものがある。《》は出典

「樂liak」 道場樂《道場樂讚文》 無量樂《般舟讚》

淨土樂《淨土樂讚》 我淨樂《六根讚》 正法樂《正法

樂讚》 西方樂《西方樂讚》 普滿樂《花讚文》

「林-liem」 沙羅林《鹿兒讚文》 花林《送師讚》

「隣-lien」 彩隣《相樂讚文》

「裏lie」 雙林裏《涅槃讚》 花臺裏《菩薩子讚文》

以上、和声の特色をタイプ別にまとめると次のようになる。

(A) 讚仏七言 句頭和声は渡り音の組み合わせにより5タイプある。

句頭に「散華樂 滿道場」を連唱した後は、隔句に

「散華樂」「滿道場」を挟み、全篇一貫する

(B) 奉請六三言 各句尾に「散華樂」和声単唱

和声レフレインは前段2唱1回、中段3唱4回、後

段1唱2回

奉請五言

「散華樂」20回単唱。「散華樂」2回と「入道場」の隔句連唱6回

(C) 弔辭系

「散華樂」22回単唱

和声型の多様性と連唱回数多さに、敦煌散華樂曲の特徴を観察できる。日本声明の散花樂は敦煌の(B)奉請系散華樂曲であるが、男声のみで、和声は一回が多数を占め、連唱するものはごく少ない。和声回数は、通常、法要時散華紙花を撒く唱和数(通常は3回)と一致するが、敦煌のそれは和声回数が多過ぎることから、実際の散花供養動作を伴わない、単に音楽伴奏であった可能性が強い。男僧と尼僧が交互に連唱し、何時間にもおよぶ長講に挿入された樂曲である点も異なる。<sup>19)</sup>(A)讚佛系散華樂は、全編一貫する釈迦成道故事に和声を組み込んだ完成度の高い作品であるが、日本ではわずかに順次往生講式の偈文にその影響をうかがうことができる。<sup>20)</sup>

### 3・僧人散華樂と樂人散華樂

では散華樂曲は實際どのように演唱されたのであろう。同時代の資料である円仁の『入唐求法巡礼記』と仏典資料、それに敦煌資料から糸口をさぐってゆく。唐代仏教儀礼の紹介者として知られる円仁は、上掲書で散華樂儀式に関し二度描写している。引用が長くなるが『巡礼行記』関連記事を下に掲げる。<sup>21)</sup>(資料の傍線およびア、イは筆者)

#### ① 開成四年(A.D.839)、赤山院における一日講式

新羅一日講式 辰時打鐘 講師都講二人入堂 講師讀師入堂之會  
大衆同音稱嘆佛名長引 其講師登北座 都講登南座了 讚佛便止  
時下有座一僧作梵 云何於此經等一行偈也 作梵了 南座唱經題目  
所謂唱經長引 音多有屈曲 唱經之會 大衆三遍散華 每散華時

各有所頌 唱經了 更短音唱題目

①の一日講式は、個人の追善供養法要で、円仁は長期講式にない散花儀礼と散花辞について特記している(イ)。これにより敦煌散花樂曲は私的法事の仏讚としても唱われたことが分かる。

#### ② 開元五年(A.D.840) 竹林寺七十二賢聖供

一僧登禮座 先打蠟鉞 次說法事之興由 一一唱舉供主名及施物色  
為施主念佛菩薩 次奉請七十二賢聖 一一稱名 每稱名竟 皆唱唯  
願慈悲哀愍我等 降臨道場 受我供養之言 立禮七十二遍 方始下  
座 更有法師登座 表嘆念佛 勸請諸佛菩薩云 一心奉請大師釋迦  
牟尼佛(中略)首皆云 一心奉請 次同音唱散花供養之文 音曲數  
般 次有尼法師 又表嘆等一如僧法師(中略)如是相替讚歎佛 直  
到半夜 事畢 俱出道場歸散 其奉請及讚文 寫取在別  
資料①②で唱された散花樂曲はともに『淨土五会念仏略法事儀讚』  
の散花樂文、つまり上述分類では(B)の奉請系散花文とされる。<sup>22)</sup>確かに①の式次第は作梵↓云何↓唱經↓散華であり、散華回数も3遍で(B)系と一致する。②の諸佛奉請の記述を時間軸上に並べかえても、式次第は敦煌の(B)系散花樂と一致する。

(表嘆僧)

一心奉請大師釋迦

(大衆同音唱)

散花供養之文

如是相替讚歎佛

(尼法師)

一心奉請大師釋迦牟尼佛

(大衆)

散花供養之文

如是相替讚嘆佛 直到半夜

しかし、「一心奉請……」と「散華樂」三唱の単純な(B)系を真夜中(②オ)まで演唱し続けるであろうか。ことに「散花供養文」は大衆(衆徒)が同音にて詠唱すると円仁は述べている(②エ)。さらに本曲を円仁は散花供養文と呼んでいるが(エ)、上掲敦煌の散花樂曲に同名の呼称は見あらず、「文」がつくのは長句の(A)讚仏系だけである(2・2章参照)。あるいは「散花供養之文」は(B)系の異曲であるかもしれない。

円仁は散花供養文を「音曲數般」と述べ、小野1964はこの部分を「散花樂の外になお數曲の讚歌を詠ずる意か」と解釈している。<sup>23</sup>しかし中国語原文をこのように解するのは無理であって、素直に「散花供養文の音曲(旋律)は幾種類もあった」と解釈すべきであろう。資料①赤山院における新羅一日講式にも「所謂唱經長引 音多有屈曲」とあり(①ア)、中国語独特の講經の複雑な旋律が、外人である円仁には印象深かったので特記したのであろう。(B)奉請系散花樂曲は旋律も詞章も単調で、幾通りも音曲があったとは考えにくい。ストーリー展開がある(A)嘆佛系もしくは類似の曲であれば、數種の唱い分けができ、夜通しの法界にも耐える莊嚴曲と呼べる。

円仁が「奉請および讚文は別に写し取つてある」と但し書きする(②カ)「奉請」が四個法要にある(B)奉請系散華辭であれば、もう一方の「讚文」とは何を指すのか。円仁「入唐新求聖教目錄」<sup>24</sup>に名が見える「請賢聖儀文并諸雜讚」一卷は、伝存しないが、七十二賢聖供は讚歌

中心の法会で(A)嘆佛系散花樂曲が含まれていたかも知れない。(B)奉請系は円仁が原文②で詞章をほぼ書き取っており、別に写し取る必要があったとすれば(B)系以外の讚文と旋律ではないか。「音曲數般」の音曲を記号化しようとしたに違いなく、日本声明にも音理学を駆使した樂譜が伝わる。

ちなみに日本密教に伝わる散華樂聲明曲は(B)奉請系のみで、唱法に2種ある。一つは「同音散花」といい、散花頭が奉請文を読み上げたあと、大衆が漢音で「散花樂 満道場」と合唱するもの。竹林寺の唱法はこの系統であろう。もう一種は「連散花」或は「次第散花」といい、散花師が「散花樂」とリードしたあとに続けて人々が逐次「散花樂 満道場」と輪唱する。<sup>25</sup>法照『淨土五會念佛略法事儀讚』に記す散花樂は輪唱するが、こちらのタイプであろう。

右作梵音了 大衆高聲各念阿彌陀佛二百口 己(以)來打淨 便作散華樂。一人唱 請大衆樂和之。(B系散花樂讚文略) 右作散華樂了次念三番六字彌陀佛兩邊 然唱讚言。(p.3216)

円仁の聞いた散花樂曲に(A)(B)二系統あったとするには充分な材料を欠くが、法会によって散花樂曲を二種または二回(以上)演奏したとみられる記述はある。既出の果字41号散花樂讚の前に、法照『淨土五會念佛略法事儀讚』<sup>26</sup>と見られる次のくだりがある。(傍線筆者)

作道場時 先須(做)梵 梵了啓請 請即須發願了 即須誦散花樂讚了 即四字念佛三五十口 即誦阿彌陀經 衆和了 即五會念佛了 即誦散花樂讚 即至誠懺悔佛前 殷到至心發願 作清靜 梵唱四禮即



散

任1934はこれを、正規の道場清浄では散花樂を二回梵唱したと解釈している。<sup>27</sup>ともに散花樂讃と呼び、続けて抄写するのが(B)系散花樂讃であるため、二回とも(B)系の可能性も大であるが、あるいは一方は(B)系の異曲であるかも知れない。

現在日本に伝わる散華樂は、法要や講式の開始を告げる「四個法要」または「三個法要」など、声明組み曲の一つで、秘儀化し諷誦性を失っているものが少なくない。しかし奈良時代、貞觀三年の東大寺大仏御頭供養会の式次第等によれば、散花樂は耳目を樂しませる身体儀式であり、かつ二回表演されている。<sup>28</sup>一回目は慶讃法要の道場莊嚴部で、樂人の花舞・天人樂のあとの嘆仏散花。二回目は法要本番の勤行部への導入部で、唄・散華行道・梵音・錫杖の四個法要次第中の僧侶による散華詠唱である。<sup>29</sup>このように、古くは日本の法要も、僧侶グループによる読經の聴覚的儀式と、樂人チームが演舞歌唱する視覚的儀式の二構成で進化した。既述の散花樂曲系統から見て、樂人は(A)系を、僧侶は(B)系という演じ分けがあったのではないか。本稿で(A)を「樂人淨道場」、(B)を「僧人奉請諸仏」と名づけたのはこのためである。唐代の仏教が音樂要素に溢れていたことは繰り返した。散華樂曲が樂器伴奏、或いは舞踊的要素も伴っていたことを示唆する記述がある。

善導『淨土五會念佛略法事儀讃』は「施主のために十万諸神が華に乗り道場に入るよう、同時に極樂成仏できるよう、諸衆は心をあわせ踴躍し、手に香華を持って常に供養せよ」と繰り返し述べる。<sup>30</sup>踴躍供

養といい、前掲円仁の記述にある僧尼衆の三輪唱といい、配役の分化がみられ、戲劇的要素を観察できる。

散華樂曲が樂器伴奏を伴っていたのではないかという指摘は、饒1991が、上例敦煌資料中のp.3216散華樂文中に朱筆で2行、以下の書き込みを発見している。

彌陀佛刹難測量 此地常聞重寶香 音□法曲詣(指)皆疆<sup>31</sup>

敦煌で法曲が盛んで、琵琶伴奏が流行していたことは事実であるが、p.3216の朱筆字は原巻を肉眼で確認しなければ、マイクロフィルムでは読み取れない。本稿では散華樂曲が樂器伴奏を伴った可能性を認めるにとどめるが、(A)讃佛系散華樂曲の詞章は変文と共通する語りと、和声のパート分化という戲劇的要素を含み、法要儀式音樂から宗教劇へ、そして大衆戲劇への胎動を感じることができると。宗教劇との関連については次の機会に稿を譲りたい。

以上、唐土の散花樂の曲奏について、次の情報を得ることが出来た。

1. 散花樂和声付きの曲には少くとも三タイプあり、円仁や法照の記述するB系は奉請讃、A系は讃仏曲、C系は弔辭の用途の別がある。
2. 旋律が屈曲多く、かつ数種類ある。
3. 男女僧と大衆の三声輪唱形式で唱された。
4. 講式で長時間連続演唱に耐える音樂内容を有し、同曲又は異曲を二回以上演じる。
5. 私的法事の仏讃にも唱われた。
6. 琵琶伴奏と舞踊を伴っていた可能性がある。

#### 4・散華盛衰

1996年8月14日、中国甘肅省天水市郊外の麦積山（ばくせきさん）四号散花楼。麦積山は北魏時代を中心とする古代仏教石窟遺跡である。足の便が悪い地域であること、仏像や特に壁画の破損が著しいため、その知名度に比し実際に訪れる人は多くない。中央にうがたれた数百の蜂の巣状石窟の中に瘦躯の魏晉仏がぎっしり安置されている。かつてここ散花楼でも法要儀式が勤行され、中空にうがたれた半露天の踊り場は音響・視覚効果が抜群であつたに違いない。散花楼の真下では麦積山寺の僧侶が占いの露店を広げ、近隣農家の老婆や子供が線香を売りに棧橋を登ってくる。僻地の寺衆にとって仏教は信仰以前に生業である。散花の曲が消えた散花楼を降りた。

8月4日、天津の大悲禪院。100mそこその門前町に仏典と占い書売る店が軒を連ねひしめき、彩色陶製の観音菩薩像や仏具が処狭しとつまれる。店主は口を濁すが、これらの書具はシンガポールやホンコン・台湾の仏教団体が功德本として発行したものを、福建や上海經由で複製加工したもので、有料で店頭に並べている<sup>32</sup>。かつて南下した仏教が、南洋からじわじわと大陸の水面下を北上しつつある。ここ天津大悲禪院の光景は、大陸の津々裏々で復活しつつある仏教の姿の象徴でもある。思い詰めた表情で老若男女が焼香叩頭し、寺通りに甘い「ナムタアユアン デイツァンプーサ（南無大願 地藏菩薩）」の唱讃が果てるともなく響いている。昨年シンガポールで聞いたあの調べである。現代版仏讃はカセットテープで南から北へ運ばれ、天津の巷に流れていた。

十世紀末まで、長安や敦煌の僧俗が演唱した散華樂曲を尋ねて、旅はなをも続く。

#### 〔付録〕散華樂曲四種

各タイプの代表的作品を各一点づつ掲げる。俗字・同音或は通音の当て字が多く使用され、この樂曲の演唱が当時敦煌地域の中國語音でなされたことを裏づける材料となる。（ ）内は筆者による俗字校訂

#### （A）嘆佛系（s. 4690v）

散華梵文一本

散連花樂 散花林 散連花樂 滿道場

啓（稽）首歸依三學樂 散花樂 天人大世（聖）十方尊 滿道場

昔在雪山求半偈 散花樂 不顧軀命捨全身 滿道場

巡曆（歷）百城求善友 散花樂 校（敲）骨出髓不生嗔 滿道場

帝釋四王捧馬足 散花樂 夜半逾城出宮圍 滿道場

苦行六年城（成）正覺 散花樂 鹿苑初度五歸（俱）輪 滿道場

弘釋慈悲度一切 散花樂 三乘設教濟群生 滿道場

大衆持花來供養 滿道場 一時舉首（手）散虛空 滿道場

#### （B-1）奉請系（p. 3216）

上中下3段から成り、中段は奉請する諸仏により内容が異なる。p. 3216は釋迦如來↓阿彌陀如來↓觀音勢至↓十萬諸佛の順である。

無題

散華樂 二唱 奉請釋迦如來入道場 散華樂 三唱

奉請阿彌陀如來入道場 散華樂 三唱

奉請觀音勢至入道場 散華樂 三唱

奉請十方諸佛入道場 散華樂 三唱

西方極樂不思議 散華樂 一唱

天上人間無數量 散華樂 一唱

(B-2a) 請觀世音讚 s. 2553 (由日藏善導《轉經行道願往生淨土

法事讚》補)

奉請觀世音 散華樂 慈悲降道場 散華樂

斂容空裏現 散華樂 忿怒伏魔王 散華樂

騰身振法鼓 散華樂 勇猛現威光 散華樂

手中香色乳 散華樂 眉際白毫光 散華樂

寶蓋隨身轉 散華樂 蓮華逐步祥 散華樂

池回八味水 散華樂 華分戒定香 散華樂

飢食九定食 散華樂 渴飲四禪漿 散華樂

西方七寶樹 散華樂 聲韻合宮商 散華樂

枝中明實相 散華樂 葉外現無常 散華樂

願捨閻浮報 散華樂 發願入西方 散華樂

(B-2b) 行道讚梵偈 (由日藏善導《轉經行道願往生淨土法事讚》補)

節錄前5句。後二句“散華樂”和声由許1963補。

奉請彌陀世尊入道場 散華樂 奉請釋迦如來入道場 散華樂

奉請十方如來入道場 散華樂

道場莊嚴極清靜 (散華樂) 天上人間無比量 (散華樂) (後略)

(C) 吊詞和声系 (p. 3120 送師讚)

人生三五歲 花林 父母送師邊 花林

師林(臨)演(演||圓)寂去 花林 捨我逐清閑 花林

送師至何處 花林 置着寶臺中 花林

送師(師)迴來无(||無)處見 花林 唯見師空房 花林

舉手開師房 花林 唯見空繩床 花林

低頭礼(理) 師座 花林 淚落數千行 花林

低頭政(整) 師履 花林 操醋(錯)内心悲 花林

与師永長別 花林 再遇是何時 花林

律論今无主 花林 有疑當問誰 花林

雙燈臺上照 花林 師去照阿誰 花林

願師早成佛 花林 弟子送師來 花林

#### 〈主要參考文獻〉

1963 『The Corpus of Dunhuang Turfan Manuscripts』

Shanghai Chinese Classics Publishing House

1965 『Dunhuang Manuscripts in British Collections』 Volume

1-10 Sichuan People's Publishing House

- 1995 『敦煌資料』 上海古籍出版社
- 1934 『日本大正新修大藏經』 47卷 85卷
- 1957 向達『唐代長安與西域文明』 生活・讀書・新知三聯出版社
- 論唐代佛曲 p. 275-293 唐代俗講考 p. 294-336
- 1996 砂岡和子『敦煌佛教文化研究』 社會縱橫增刊甘肅敦煌學會社會縱橫編輯部合編
- 1934 任二北『敦煌曲初探』 上海文藝聯合出版社
- 1955 任二北『敦煌曲校錄』 上海文藝聯合出版社
- 1971 饒宗熙 & Paul Demieville 『Airs DE Touen-Houang』  
Centre National de la Recherche Scientifique
- 1989 饒宗熙『唐戲弄』 全二冊 上海古籍出版社
- 1936 許國霖『敦煌石室經題記與敦煌雜錄』 微妙叢書刊
- 1966 難波正『散華の研究』 岡山大學教養学部研究集録第22号
- 1995 天納他『佛教音樂辭典 付録CD 仏教音樂の世界』 仏藏館
- 1984 横道・片岡編『聲明辭典 聲明体系特別付録』 法藏館
- 1990 吳蕭森『敦煌歌辭選注』 遼寧人民出版社
- 1986 円仁『入唐求法巡礼行記』 上海古籍出版社
- 1964 小野勝年『圓仁の見た唐の佛教儀礼』 『慈覺大師研究』 早稲田大學出版社
- 1967 小野勝年『入唐求法巡禮行記の研究』 全4卷 鈴木學術財団
- 1975 塚本善隆『唐中期の淨土教』 法藏館
- 1996 佐藤道子『法会と儀礼』 『唱導仏教』 法藏館
- 1984 福井文雅『講經儀式的組織内容』 『講座敦煌』 7

散花梵文平 散蓮花樂 散花林 散蓮花樂滿道場  
 啓首歸依三摩滿散花樂 天大世十方尊滿道場 肯  
 在雪山求半偈 散花樂 不願驅命捨全身滿道場 巡曆  
 百城求善友 散花樂 校骨出髓不生嗔滿道場 帝釋四  
 王捧馬足 散花樂 夜半向城出宮園滿道場 普行六  
 年成正覺 散花樂 慈覺初度五輪滿道場 初覺意  
 悲度一切 散花樂 三帝設教濟群生滿道場 大衆  
 持花來供養 散花樂 一時舉手散虛空滿道場

衆生何處 散花樂 我之樂以若三塗未審於中  
 父母三寶名字已不苦哉苦哉 蓮花藏界今  
 日得聞衆共傾心不苦廣從 大師密藏甘露  
 真詮喜慶今聞衆 廣說 我今懺悔不敢覆藏惟  
 願戒師慈悲廣說 如來地曠却難聞今遍宣揚為  
 高廣說 深心懺悔不敢覆藏露瞻彼肝發露懺悔  
 曠大劫來恒以罪業今聞此戒並得消除惟為我施歡喜

1977 竹中信常「善導浄土教における講式の意味」

『善導教学の成立とその展開』山喜房佛書林所収

1982 廣川堯敏「敦煌出土法照関係資料について」石田充之博士古

希記念論文集『浄土教の研究』

1993 李正于「敦煌儺散戏」『敦煌研究』2期

1987 李正于「晚唐敦煌本《釋迦因縁劇本》」『敦煌研究』1期

#### 〈注釋〉

(1) 平成8年7月5日、国立劇場第19回音楽公演「古譜の復曲と古代音楽の演奏」第一部敦煌文書による委嘱復曲初演、第二部復元楽器による委嘱創作初演。但し委嘱相手を明記せず、唯一プログラムに芝祐靖氏の「私見の訳譜・オーケストレーションによる敦煌音楽であつてアカデミックな敦煌琵琶譜研究とは無縁」(p.6)の言があるのみ。

(2) 同上冊子p.4-6 雅楽演奏家芝祐靖「敦煌文書 琵琶譜について」

(3) 1988年8月20-25日北京市内にて開催。砂岡1988年11月 東京都立大学『語学漫步』10号報告記。

(4) 1900年中国敦煌莫高窟発見文書中の唐代琵琶曲の楽譜。敦煌琵琶譜の代表的研究には以下の諸著書がある。

1969年 林謙三『雅楽—古楽譜の解説』音楽之友社

1991年 饒宗頤『敦煌琵琶譜論文集』新文堂出版公司

1991年 牛龍菲『敦煌壁画楽史資料総録與研究』敦煌文芸出版社

1992年 席臻貫『古絲路音樂暨敦煌舞譜研究』敦煌文芸出版社

(5) 本稿の標音は中国中古音(中原域標準語音)の推定音(1986年郭錫良『漢字古音手冊』北京大学出版社)による。ただし敦煌は中原域より西北に位置し、本稿の散華樂を含め唐末五代文献にはこの地の方言の影響が強く見られる。

(6) 参考文献1984『声明辞典』横道萬里雄p.14 および1994『佛教音樂辭典』付録CD

(7) 1957向達『唐代長安与西域文明』p.257-336、1987、1993 李正于の二論文暨『唐戲弄』p.257-336、

#### 参照

(8) 本稿第3章田仁『入唐求法巡礼行記』中の散華樂演奏関連記事参照  
(9) 砂岡和子1996p.22-29。ただし許1936が目録に挙げる周90号は『散花梵』(己巳年二月一日報恩寺僧延行寫)とあるが本文に収録しない。敦煌写本の他にも注(10)大正藏所収善導轉經行道往生浄土法事儀讃」の散花樂2件を含めた。同書は敦煌写本も数種あるが散花樂部分は失われている。

(10) 廣川1984は計6件(p.2563、p.3645、s.1781、s.5572、s.6417、周90号)、饒1971は上掲s.1781、s.5557、s.6417、周90号以外にs.668、s.4690、s.5557、制5号、果字41号、大正藏47冊所収法照「浄土五會念佛略法事儀讃」と善導「轉經行道願往生浄土法事讃上」散花樂各一件を加えた計11点を載せる。

(11) 法照「淨土五會念佛讚」所収。大正藏および敦煌本「淨土五會念佛略法事儀讚」卷中・下参照。

(12) 各句末文型和声に対し、句頭にある和声で「散(連)華樂 散華(連)散(連)華樂 滿道場」を基本型とし、(一)部分字句が異なる異文が存在する。2・3章に詳述。

(13) 許1963は原卷の「散々華々樂々」を「散散華華樂樂」と校録するが、「散華樂散華樂」が正しい。敦煌文書は例えば和声「淨土樂淨土樂」を「淨々土々樂々」と繰り返して記号を用いる。

(14) 「請觀世音讚」と「行道讚偈」は形式と内容から、2文件でセツトの散花樂曲と見なし、2a、2bとした。資料編参照。

(15) 法照「淨土五會念仏略法事儀讚一卷並序」『大正藏47』p.475

(16) 和声の単唱回数表示法は文献で異なる。果字41号(北8345)

は前3句に和声「散華樂」が1回付き、直後に再び「散華樂 散華樂」と続く。これは導師(表嘆師)の冒頭句リードに続き、大衆が2回唱和する次(連)散華唱法を指すのであろう。対してp.2130は「散華樂 散華樂 散華樂」、p.3216は「散華樂三唱」とあり、同時和声と輪唱の区別を明示しない。

(17) 唐代の「樂」には/lauk/以外に/geauk/音もあるが前者と推定した。近現代中国音で樂曲名を指す「樂」は/lauk/系である。参考文献1994『佛教音樂辭典』付録CDの日本天台宗および真言宗の声明「云何唄・散華・三奉請」も「散華樂」の「樂」を前者に唱している。

(18) 無意味の流音の集合からなる和声と「散華樂」のように有意味の

和声に分けられる。饒1971 p.209-212

(19) 本稿3章齊州竹林寺七十二賢聖供、法照「淨土五會念仏略法事儀讚」(『大正藏』47卷p.475) 参照

(20) 1990「順次往生講式」大正大学総合佛教研究所年報第12号p.209およびp.237散華・讚嘆礼拝後の頌は以下のものである。

稽首天人所供敬 阿彌陀佛兩足尊 在彼微妙安樂國  
無量佛子衆圍繞 南無極樂化種彌陀如來 三返

本讚は『淨土論・讚阿彌陀佛文』(大正藏47)に同じ。

(21) 1967および1986の円仁『入唐求法巡禮行記』録文による。

(22) 小野1964は資料②の本賢聖供は法照創始の淨土五會念仏に該当するであろうと指摘するp.200。

(23) 同上p.200

(24) 小野1967 第4卷付録。

(25) 1984『声明辭典』p.140、1994『佛教音樂辭典』p.106、108注(16)参照。

(26) 『大正藏』47卷所収資料もほぼ同文

(27) 任二北1934 p.77。『大正藏』47卷所収資料もほぼ同文

(28) 佐藤道子1996 p.96-99

(29) 同上p.96-99

(30) 善導「轉經行道願往生淨土法事讚上」『大正藏』47卷p.424-430

(31) 饒1971 p.217-218

(32) 発行年欠『中英注音楞嚴咒』上海市新聞出版局内部資料

発行者、年号欠『佛教念誦集』等仏書および『地藏聖讃專集』『供  
佛』他カセットテープ多数。